令和4年度（2022年度）
第72次 印旛地区教育研究集会
外国語研究部 提案資料

英語を使って自ら人と関わろうとする児童の育成
～英語好きな児童を育成する英語指導の工夫～

四街道市立山梨小学校
教諭 三木 ちあ紀
教諭 戸田 大輔
英語専科 清田 真理

1 研究主題

英語を使って自ら人と関わろうとする児童の育成

～英語好きな児童を育成する英語指導の工夫～

2 主題設定の理由

(1)社会の要請から

技術の急速な進歩により、社会や経済のグローバル化が急速に進展している。それに伴い、知的財産や技術、人材をめぐる国際競争が過熱している。一方で、異なる文化の理解や、国家・民族との共生、協力も求められている。これらの社会の変遷を受け、学校教育においても外国語教育を充実させることが、重要な課題の一つとなっている。

学習指導要領では、外国語科の目標について、以下のように示している。

> 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1)外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
> (2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
> (3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

これらを踏まえ、小学校段階で外国語に触れたり、体験したりする機会を児童に与えることにより、中・高等学校において、円滑な英語学習を進めていくための素地・基礎を築き、コミュニケーション能力を育成することが求められている。

(2)四街道市の取組

四街道市では、小中一貫教育の大きな柱として義務教育9年間を見通した連続性のある外国語教育が推進されている。平成30年度・令和元年度の2年間、小学校第1学年から「聞くこと」「話すこと[やりとり]」「話すこと[発表]」「読むこと」「書くこと」の能力をバランスよく育成し、児童の語学力及びコミュニケーション能力の向上を図るため、英語教育推進モデル校4小学校(旭小学校・山梨小学校・みそら小学校・吉岡小学校)を文部科学省教育課程特例校に申請し、「英語科」の新設が行われた。さらに、令和2年度からは、英語教育推進モデル校での研究成果を市内全域に広げ、文部科学省教育課程特例校として「外国語科」が新設された。これにより、小学校第1学年から発達の段階に応じた4技能の指導を小中一貫してスパイラルに行うことで、音と文字のつながりを体系的に身に付け、コミュニケーション能力の更なる向上を目指している。以下の表は、学習指導要領との対比表である。

	文部科学省版						四街道市版					
教科領域	外国語科（５・６年） 外国語活動（３・４年）						外国語科（１～６年）					
技能		L	R	SI	SP	W		L	R	SI	SP	W
	５・６年	○	○	○	○	○	５・６年	○	○	○	○	○
	３・４年	○	―	○	○	―	３・４年	○	○	○	○	○
	１・２年	―	―	―	―	―	１・２年	○	○	○	○	○
時間数	５・６年	７０時間					５・６年	７０時間				
	３・４年	３５時間					３・４年	３５時間				
	１・２年	―					１・２年	３５時間（３４時間）				
語数	600～700 語						900～1000 語					

四街道市では、小学校での外国語教育を推進するため、以下のような様々な手立てが講じられている。

①「四街道市小学校外国語科指導基準」「四街道市小学校外国語科指導略案」

全国的に「HRTがT1、ALTはアシスタント」というスタイルで授業を行うことを目指している。学級の実態をよく知っているHRTが授業コーディネート・コントロールをして、ALTは発音の補助やデモンストレーションを行うなど、HRTとALTが役割分担をして授業を行うことになっているが、英語が専門教科でない小学校教員がT1として授業を行うことは、ハードルが高い。そこでHRTがT1となって円滑に授業を進めるための足がかりとして、「四街道市小学校外国語科指導基準」「四街道市小学外国語科指導略案」の二冊が各校に配付されている。全学年、毎時間の授業の略案が掲載されていて、HRTはこれをベースに児童の実態を配慮しながら授業を行っている。

②四街道市外国語教育ポータルサイト

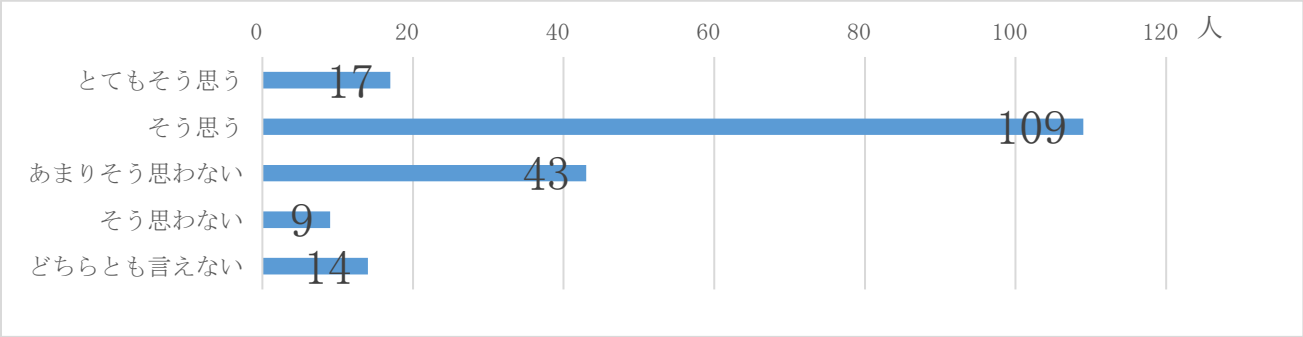
全教員の校務用パソコンのデスクトップページに四街道市外国語教育ポータルサイトが貼りつけられている。ポータルサイトには、上段で上げた「四街道市小学校外国語科指導基準」「四街道市小学校外国語科指導略案」のデータ、アクティビティの参考動画、ワークシート、授業で活用できる英語の歌などが掲載されている。

③小学校教員向けフォローアップ研修

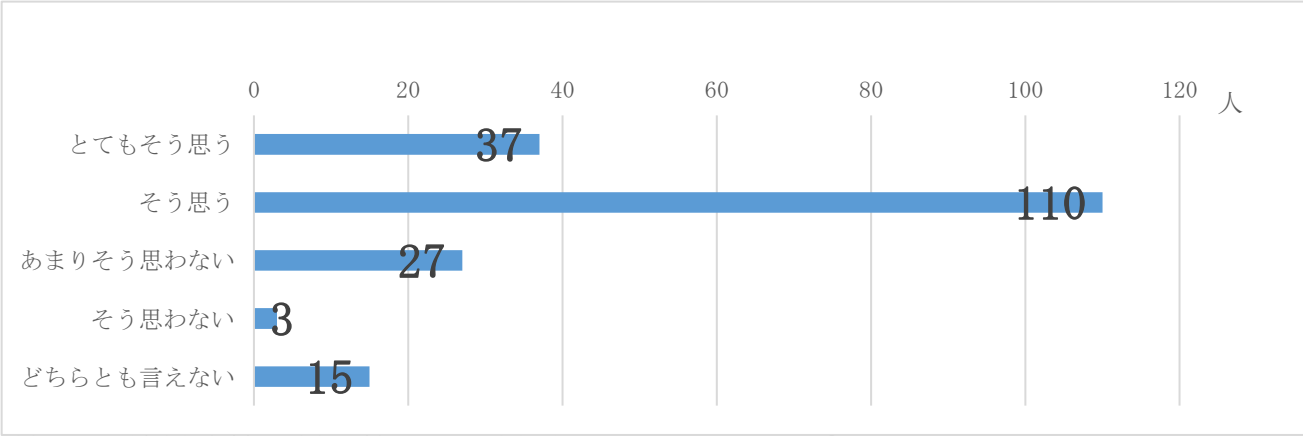
夏休み中には、四街道市教育委員会指導主事、ALTによって行われる研修会「English Short Program」「A-GO!Summer Camp」が実施されている。ワークショップ形式のプログラムで、授業のポイント・アクテビティの方法等を学ぶことができる。市内の先生方と交流をすることで外国語教育への取組について知ることもできる。コロナ禍でも、オンラインで開催された。

これらの取組を通して、外国語科に対して教員の意識や児童の態度の向上がみられるようになった。以下は昨年度末に実施された、市内全12小学校（回答職員192名）の外国語科に関するアンケートの結果である。

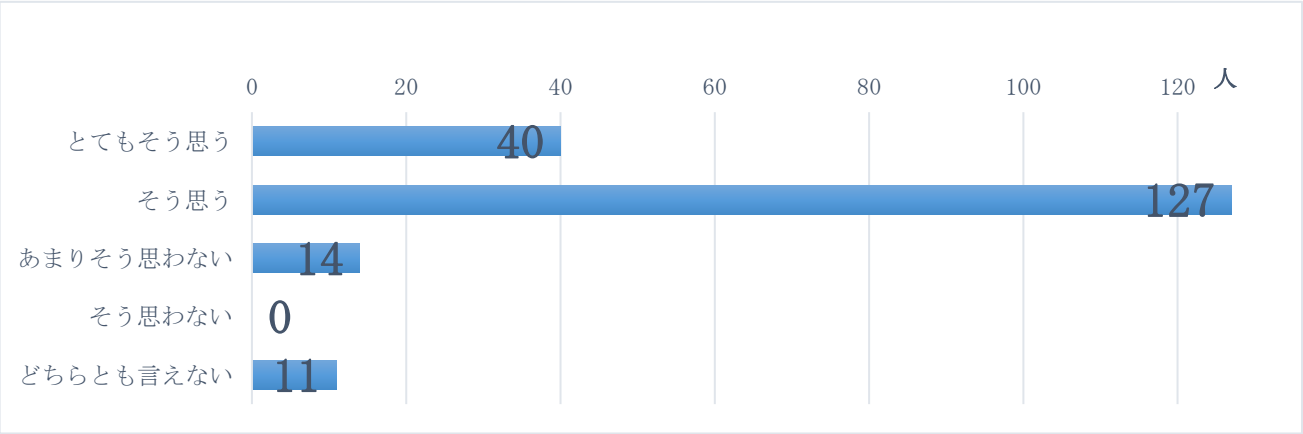
Q.日々の授業を通して、以前より自信をもって英語を指導できるようになったと感じますか。



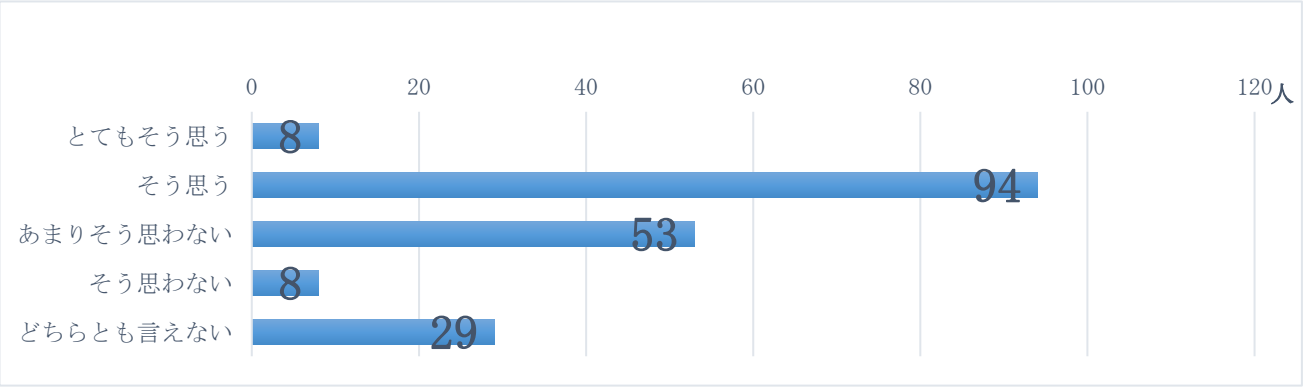
Q.ALT や専科教諭と、打ち合わせを含め効果的な T.T.が展開できたと感じますか。



Q.児童の外国語学習に対する肯定的な態度の向上を感じられましたか。



Q.児童の中学校の英語学習に対する不安は軽減されたと感じますか。



(3)本校の取組

山梨小学校教育目標 心豊かに学びを拓く実践人 －人や自然を大切にし、社会に学びを拓く児童の育成－

本校では、地域社会と関わりながら自ら学び、確かな学力を備えた心身ともに健やかな児童を育成することを目指している。外国語科学習においても、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図り、学習習慣づくりを行い、確かな学力の育成を図ることを重点としている。人的環境を生かした体験的な学習の機会を計画的に設け、体験に基づいた確かな理解を促すことが、心豊かに学びを拓くことにつながると考える。そのために、外国語科学習においては外国の文化や言語に興味がもてるような授業改善、環境整備を行うことを目指して取り組んでいる。

(4)児童の実態から

本校児童は素直で、友達や教師と進んで関わろうとする児童が多い。また、四街道自然同好会を始め、ふれあいパトロール隊、食と緑の会など、地域の様々な方々と関わりをもつ学習が多く、学校以外の人とコミュニケーションをとる活動に恵まれている。学習に対する意欲は高く、国語科や社会科は比較的基礎的な学力が身についていると言える。課題としては、個人間や学年間で学力に偏りがあること、集中できる教科と集中できない教科に差があることが挙げられる。英語を話したいという意欲は高いが、日常での活用場面が少なく、授業の中だけの英語にとどまっている現状がある。

本校の外国語科学習のねらいは、コミュニケーションツールとしての英語を身に付け、英語を使って自ら人と関

わろうとする児童の育成にある。このねらいを達成するためには、教師の英語の指導力の向上や、授業展開の方法、教室環境・校内環境の整備が必要である。また本研究を通して英語好きな児童を育成することがねらいを達成することにつながると同時に、英語を使って世界の人々とつながっていこうとする意欲を育んでいきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究の目標

目指す児童像
①英語で話そうとする意欲をもった児童
②コミュニケーションの技能を身に付けた児童
③英語への興味・関心をもった児童

4 研究の仮説

仮説1
外国語科の学習の中で、知識・技能が向上するような指導過程を工夫すれば、意欲的に英語を使ったコミュニケーションが取れるようになるだろう。

（手立て）
(A)変化のある発話練習の仕方をくり返し行うことにより、知識・技能を向上させる。
(B)ICT 機器を効果的に活用し、コミュニケーションに必要な知識・技能を向上させる。

仮説2
外国語科の学習の中で、児童が自らコミュニケーションをとるような場面設定を工夫すれば、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育つだろう。

（手立て）
(C)ユニットの最終ゴールを明確にした授業を展開する。

5 研究の実際と実践例

仮説1について

〈令和4年度　6年生の実践〉

単元：Lesson 3 Welcome to Japan.(全8時間)

目標：◆日本の行事や食べ物、味の表現を聞いたり言ったりすることができる。（知識・技能）
◆日本の文化を紹介する表現を知って、聞いたり言ったりすることができる。（知識・技能）
●ポスターを作って、好きな日本の文化を紹介することができる。（思考・判断・表現）
★日本の文化を分かりやすく伝えようとしたり、様々な文化について知ろうとしたりする。（学びに向かう力・人間性等）

主な言語材料

You can (enjoy hanami) in (April). / What do you like about Japan in (August)? / I like summer festival.

【形容詞】sweet/bitter/sour/salty

【語彙】日本の伝統的な文化、行事等

(A)変化のある発話練習を繰り返し行う。

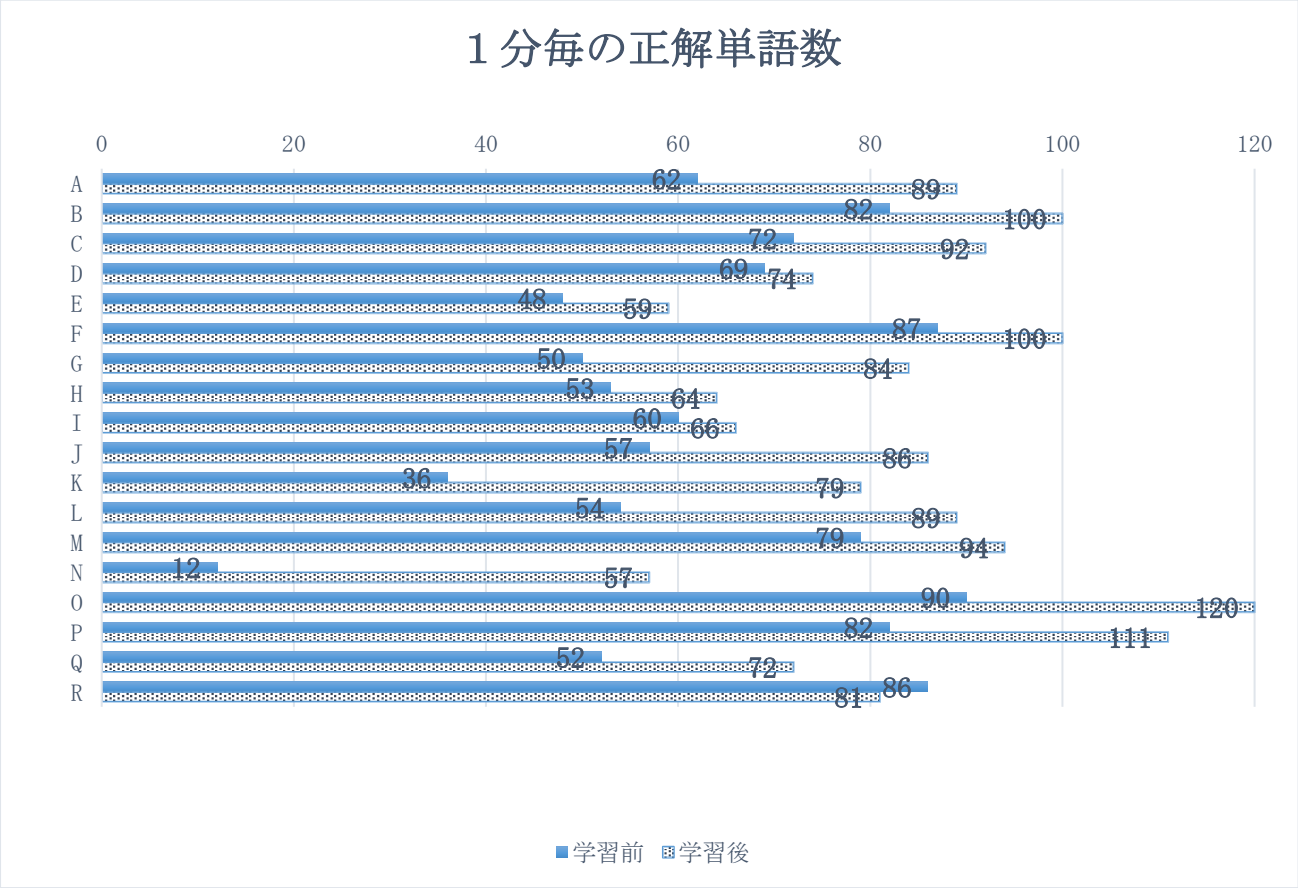
四街道市の全校に EDURE コミュニケーションズ提供の Metrolearning(Red/Orange)が支給されている。単語や基本的な文章をメトロノームのリズムに合わせてくり返し発話練習する目的の教材である。英語と日本語のリズムには大きな違いがある。小学校の発達段階で、英語独特のリズムや単語のアクセントを学ぶために、リズムを用いた練習方法は、有効であると考えられる。

本校では、1・2年生が、主に Metrolearning を使って単語の発話練習を行っている。メトロノームのテンポを 80 と 100 で選択することが可能なため、児童の実態をHRTが見極めて難易度を調節できる。単調になってしまいがちな発話練習が、Metrolearning を活用することにより楽しく行うことができる。

Metrolearning での学習に慣れて、学年が上がっていくと、「テンポ 100 では物足りない。」「もっと速いスピードでやってみたい。」という児童の声が出てきた。そこで、Metrolearning 以外にも、キーボードのビートボックスを使った練習、メトロノームアプリを使うなど、児童の実態に応じてHRTのやりやすい方法で発話練習を行っている。

ここで、6年生の実践を紹介する。6年生では、キーボードのリズムボックスを使って、毎回単語練習やキーワードセンテンスの練習を行っている。

Microsoft Teams の音読課題(Reading progress)を使用した(次ページに詳細記載)学習前とリズムボックスを用いて単語練習を行った学習後の読むことにおける1分毎の正解単語数の変化は次のとおりであった。

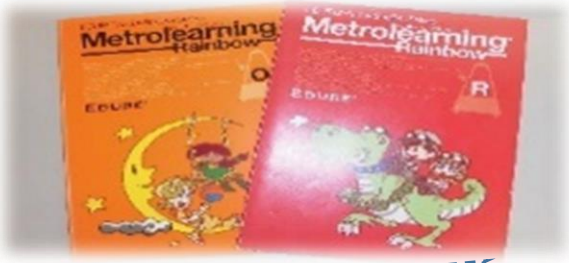


18人中17人の児童の1分毎の正解単語数が上がっている。上昇率の平均は 21.4 であった。1分毎の正解単語数が上昇しているということは、出題された単語をスムーズに読むことができていると捉えられる。リズムにのって

単語練習やターゲットセンテンスの練習を行うことは、知識・技能の向上に有効で、英語でスムーズにコミュニケーションを図るための一助になるといえる。

一方で日本人のHRTの多くは、センテンスの区切りが分からず、適切にリズムを使えない、自信がないという課題をもっている。どこで区切るかは、センテンスにより異なってくる。分からない場合には、ALTに相談する、発音する場面ではALTに任せるなど、HRTとALTとの役割分担をすることの重要性を改めて認識する機会にもなった。

Metrolearning 学習画面

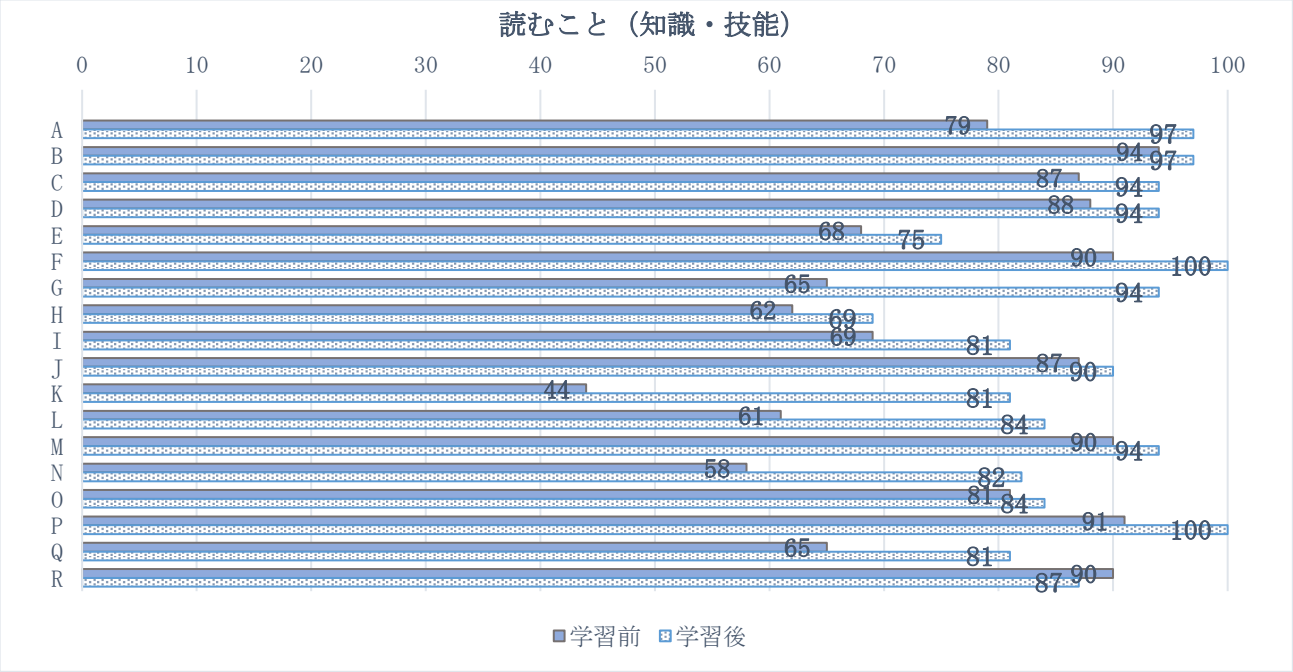


Metrolearning(Red/Orange)

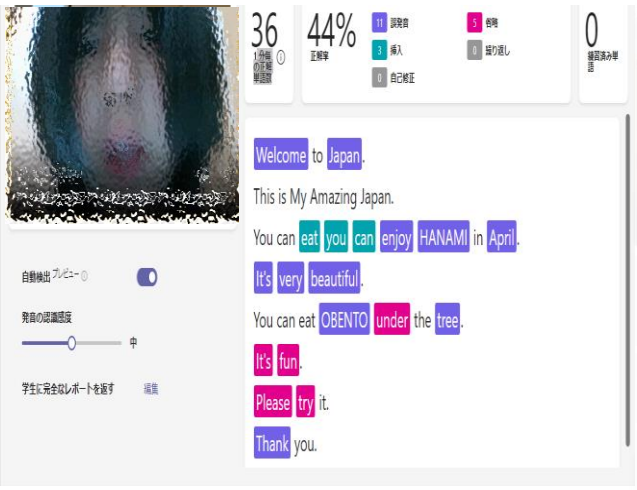
(B) ICT 機器を効果的に活用し、コミュニケーションに必要な知識・技能を向上させる。

① 実態調査では Microsoft Teams の音読課題(Reading progress)を使用した(資料編指導案参照)。出された文章を音読し、Teams 上で提出をすると AI が誤発音・省略・挿入部分などを解析し、採点をしてくれる。AI が採点したものを参考として、教師が訂正を加えることも可能である。また、発音の認識感度や試行回数の制限も可能であり、フィードバックの際には、教師から個々にコメントを入れて返すこともできる。学校でやると周囲の音を拾ってしまい、AIが正しく採点を行えないという問題が発生したため、音読課題(Reading progress)については家庭で行ったものを提出させた。家庭でやったことにより、授業の中では、Clear voice とは言い難い児童でも、しっかりと声を出していて、個々の発音確認に大いに役立てることができた。

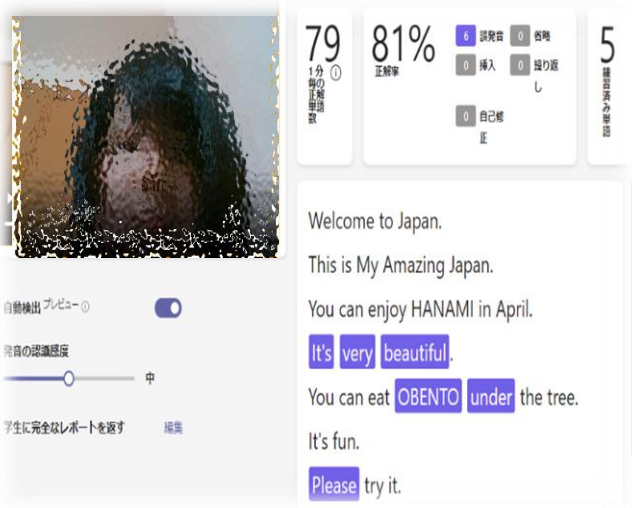
児童は、フィードバックをされる際に、初めて点数が分かるので、「もっと練習してよい点数を出したい。」「先生、今回の英語課題の点数はどうでしたか？」など関心・意欲が高まったことがうかがえた。また、学習前と学習後のフィードバックされた自分の動画を見比べている児童が非常に多かった。以下が学習前と学習後の点数の変容である。



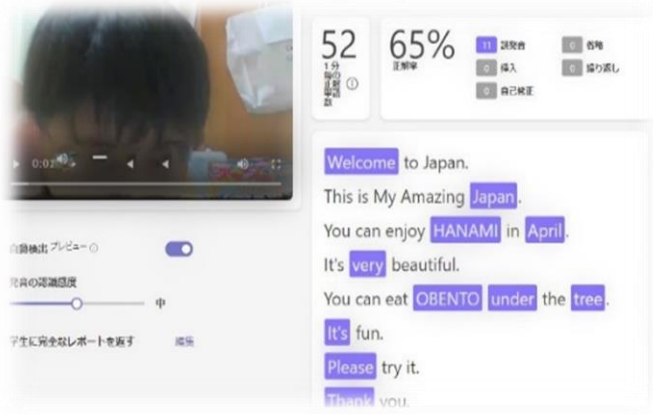
■K児の単元前



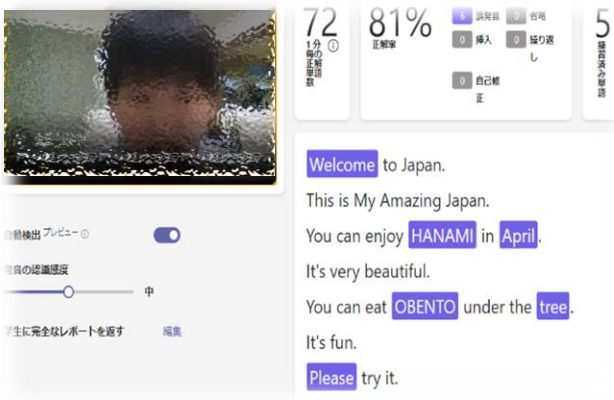
■K児の単元後



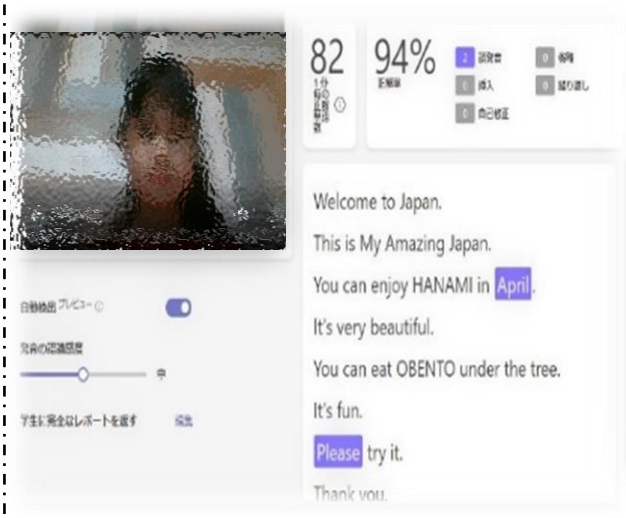
■Q児の単元前



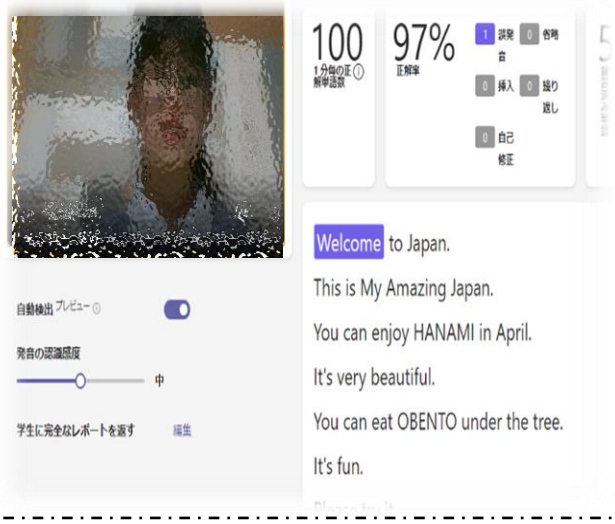
■Q児の単元後



■B児の単元前



■B児の単元後



学習前、全体的に「L」「R」の文字が入る単語に誤発音が目立った。また、「hanami」「obento」などの英語と日本語の使い分けができない児童が多かった。学習後は、これらの誤発音が減少し、使い分けもできている児童が多かったことが分かった。

② 学習の後半のプレゼンテーションでは、ミライシードのオクリンクを使用して資料作成を行った。（プレゼン資料参照）オクリンクを使用することにより、プレゼンテーションの幅や自由度が広がり、教科書の単語のみにとらわれず、児童が本当に伝えたいこと、本当に表現したいことを伝えるすることができた。表現したいけれど、未学習で分からない表現については、教師に質問をしたり、インターネットで調べたりして作成をした。インターネットで調べると、難しすぎる表現になってしまうこともあったため、HRTとALTとで分担をして、小学生でも理解しやすいような表現に変換する支援をした。タブレットでプレゼンテーション資料を作成するにあたり、授業の中では、文章作成や発話練習のみを行うことと制限をかけた。資料のデザインにこだわりすぎて本来の目的から外れてしまわないようにするためである。本校では、毎日タブレットの持ち帰りをしているため、資料デザインは自主学習として家庭で行ったり、猛暑で外遊びができない休み時間に行ったりしている児童が多かった。

③ プレゼンテーションの練習時に、自分たちのタブレットで練習の様子を撮影し、次回の練習に活用させた。これにより、過去の自分たちと対話的に学びを深めることができた。「次は、もっとアイコンタクトに気を付けよう。」とか「マスクをしているから、もう少し声の大きさを考えないと何を言っているか分からない。」などの声が聞かれた。外国語科の授業の中で大切にしている4つのポイント「clear voice」「eye contact」「gesture」「smile」に視点を定めて、友だちや教師と動画を見ながら試行錯誤を繰り返し意欲的に練習することができた。

友だちに録画してもらった練習動画を確認して
次は何に気を付けて話すかを考えている。
友だちとお互いにアドバイスをし合うことで
協働的な学びの一つとなった。

1端末あれば、端末の画面の半分はオクリンクで
作成したプレゼンテーション画面を映して、もう半
分はカメラを起動して録画をすることができる。

一方で自分たちの練習動画ばかりでは、間違った発音のまま覚えてしまう、自由に自己表現させると難しい単語にぶつかっていくという問題が発生した。児童が表現する内容がそれぞれ違い、多岐に渡るとHRTとALTの

二人体制で支援をしても、間に合わないという課題も出てきた。そこで、単元終盤から Microsoft OneNote の読み上げ機能「イマーシブ・リーダー」を活用した。単語や文章を入力するとネイティブの発音で読み上げをしてくれる機能である。これを使ったことにより、より正しい発音で表現することが可能になった。単元の最終、ファイナルアクティビティでは、外部人材活用を依頼したネイティブのゲストから「児童の発音がとてもきれいで驚きました。」「勇気がありますね。自信たっぷりに堂々とプレゼンテーションをしてくれました。」との声が聞かれた。

Microsoft OneNote「イマーシブ・リーダー」を活用している。
発音のスピードが調整できるため、自分のレベルに適した
個人練習が可能であることから、個別最適な学びに活用できると
考えられる。

仮説2について

(C) ユニットの最終ゴールを明確にした授業を展開する

学習前のアンケートで『英語で学習した成果や、英語プレゼンテーションを誰に見たり聞いたりしてほしいか』と質問したところ、保護者、地域の人、外国の人という回答が非常に多かった。そこで、ファイナル・アクティビティとして市内にALTを派遣しているインタラックのALT・近隣中学校のALT・YOCCA（四街道市国際交流協会）の方、四街道市教育委員会外国語科担当指導主事を招いた「My Amazing Japan!!」プレゼンテーションを行った。

前時では、クラスの友だち、市内の外国語科主任の先生方にプレゼンテーションを見てもらった。大型TVにプレゼンテーション画面を映して、手元でPCを操作しながら発表を行った。「緊張して、発音を間違えてしまった。」「パソコンの画面ばかり見てしまい、アイ・コンタクトができなかった。」などと悔しい経験をした。その経験を糧にして「次はこうしたい。」という明確な目標と次回への意欲をもつことができた。また「外国の方や英語が堪能な地域の方に聞いてもらう」という目的意識も意欲向上の一助にすることができた。

ファイナル・アクティビティでは、ネイティブの方5名を含む12名のゲストがプレゼンテーションに参加した。ゲスト1人に対して1グループずつ（1人・2人組・3人組かは児童が自由選択した）プレゼンテーションを行いローテーションしていく形式で実施した。前時の反省としてプレゼンテーション資料があると、資料ばかり見てしまい、アイ・コンタクトが取れない、タブレットを持っているとジェスチャーもできないという意見が児童から挙がった。そこでプレゼンテーション資料を映したタブレットはゲストに渡し、話すことに集中できる形式にした。20分弱のアクティビティだったが、積極的にゲストに話しかけプレゼンテーションをすることができた。また、ゲストからの質問に今まで習った英語を駆使してコミュニケーションを図ろうとしていたり、補足の説明をしたりする姿がみられた。

Hello.
My name is Jasmin.
My name is Paris.
Nice to meet you.

外国語科の授業では、English name を用いてやりとりをしている。

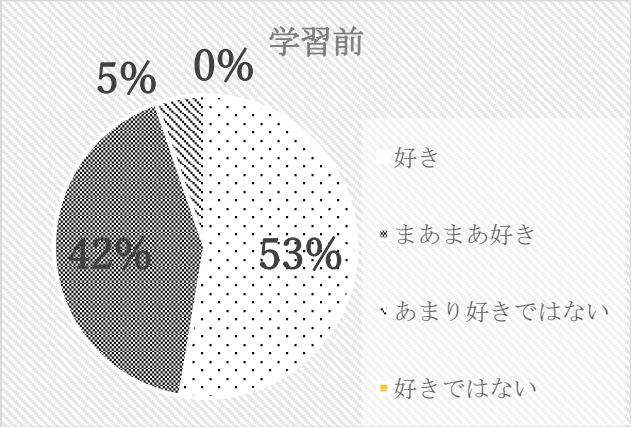
My name is Chris.
Nice to meet you.
Welcome to Japan.
This is my Amazing Japan!
Next slide please.

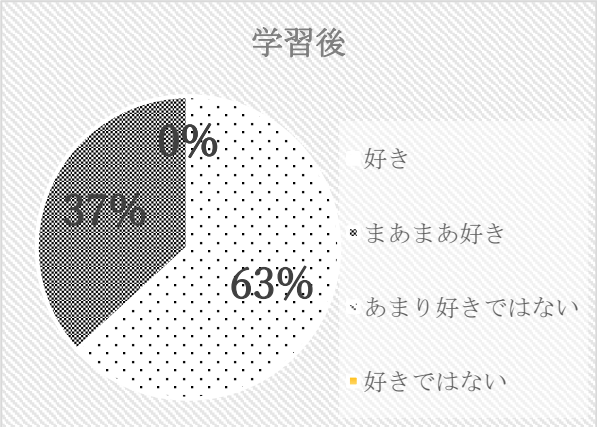
感染症対応のため欠席した児童は
タブレットを使って、オンラインで
プレゼンテーションを行った。

授業を終えて児童からは「相手の質問が分からなくて答えられないところもあった。質問されたことに対して言葉を返すことができたところもあって会話になっているときがあった。」「英語って難しい。けれど、伝わると楽しい。」「「リベンジマッチが成功した。」「Thank you.ばかりの返事になってしまったけれど、途中で言葉のキャッチボールができたときはうれしかった。」などの振り返りがみられた。

以下、6年生　Unit　3「Welcome to Japan」の情意面及び知識・技能面の変容である。

質問1. 英語の学習は好きですか。



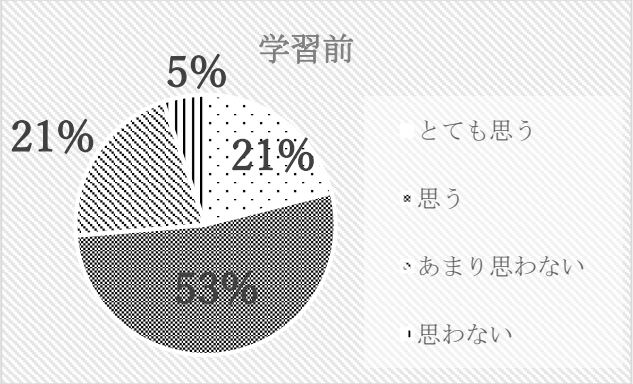


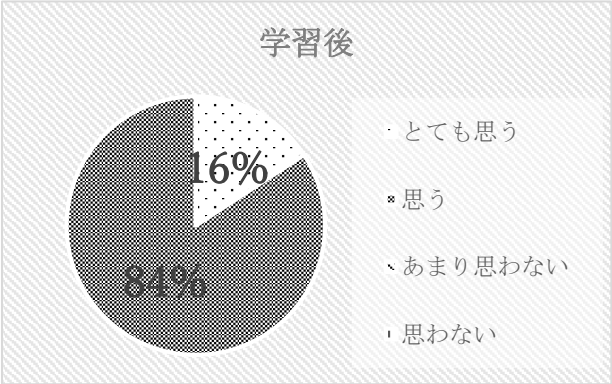
理由
好き：外国に行きたい気持ちがある。英語を覚えたい。
どんどん覚えていく感覚が楽しい。
知らなかった単語を覚えるのが好き。
好きではない：発音・読み書きが難しい。

理由
好き：難しいけれど、相手に伝われば楽い。
英語で言葉のキャッチボールができたことが嬉しいから。
みんなとリズムに乗って覚えるのが好き。
英語を覚えて損はないから。
外国の人と話すことができれば、人生楽しくなると思うから。

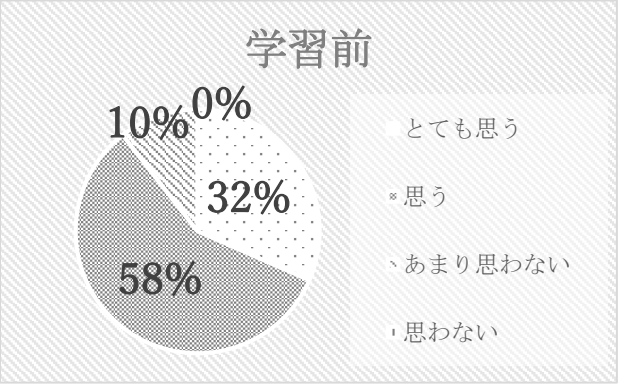
テキストマイニング。
児童アンケートの自由記述で，多く使われた単語ほど大きく表示されている。

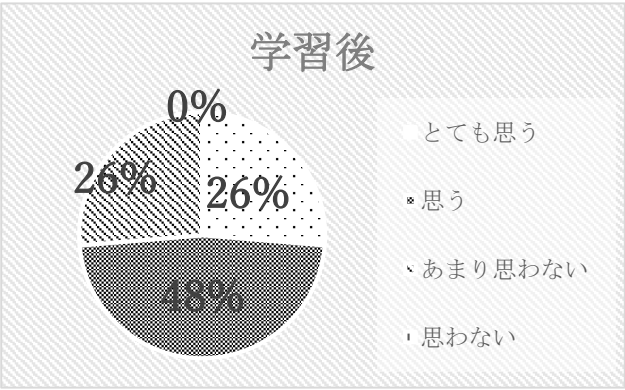
質問2.自分の気持ちや考えを英語で伝えていますか。



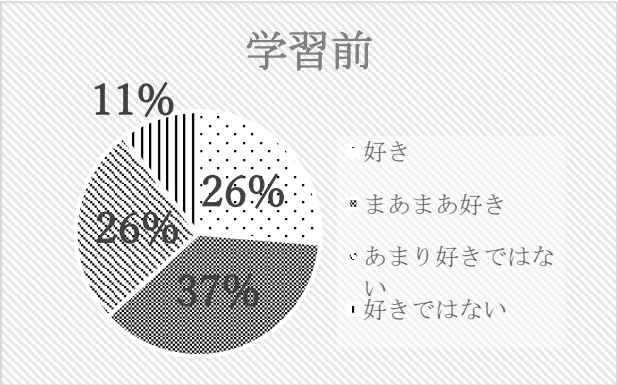


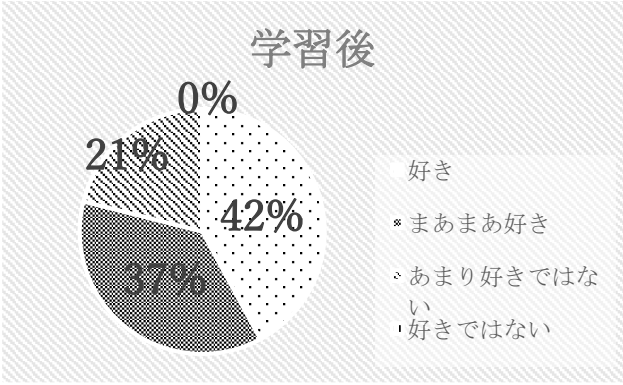
質問3. 自分の気持ちや考えを英語で伝えたいと思いますか。





質問4. 英語でプレゼンテーションすることは好きですか。

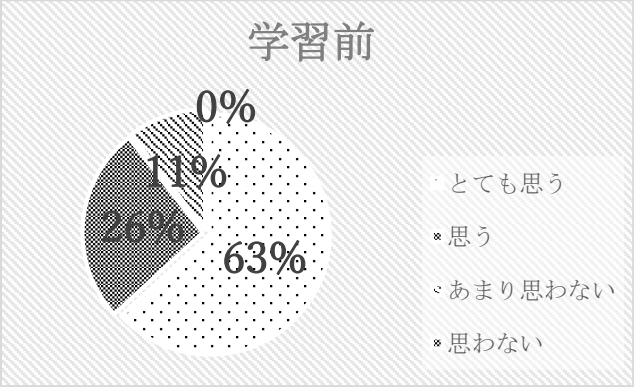


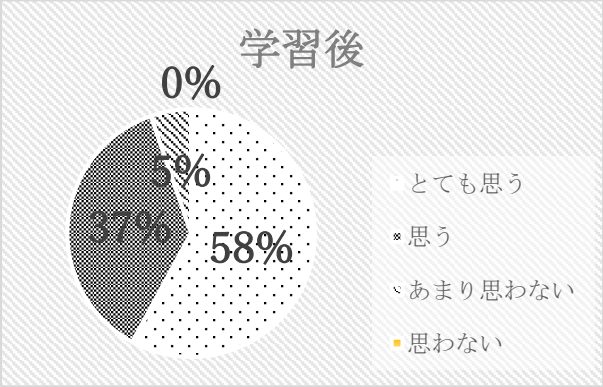


理由
好き:楽しいから。
みんなに自分の発表を聞いてほしい。
自分のレベルが分かる気がするから。
好きではない:緊張して上手く言えないから。
恥ずかしい。人前が苦手だから。
発表が苦手だから。

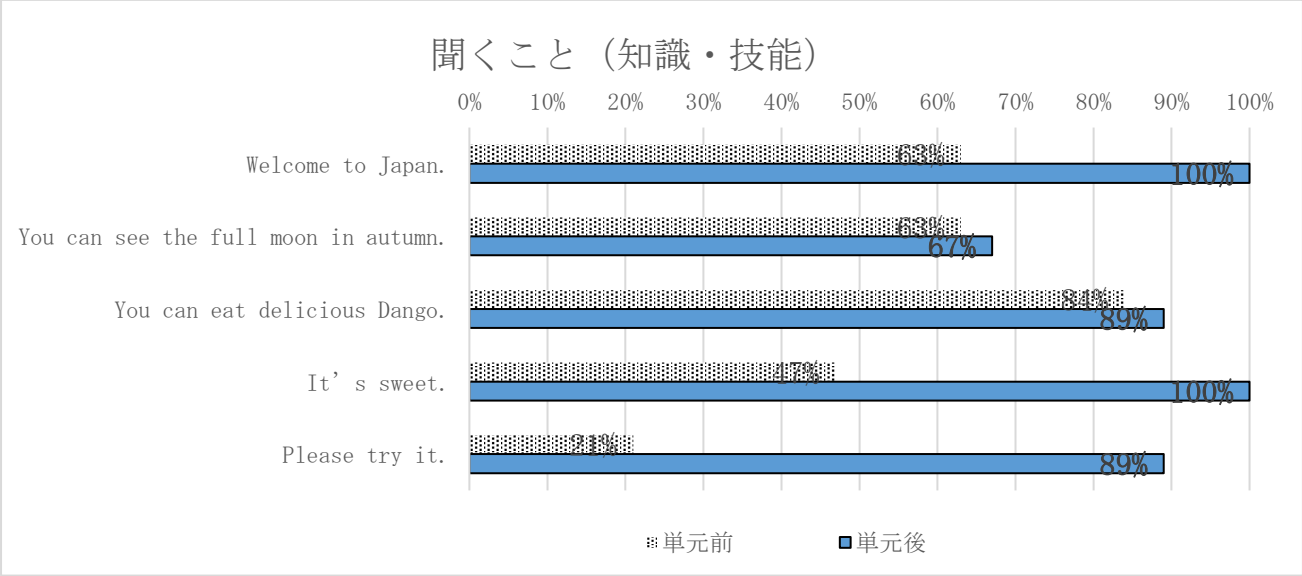
理由
好き:外国の方の前でやったことで、自分から進んでできるようになり自信がもてた。
緊張するけれど、うまくできたときうれしい。
がんばってまとめたことで、相手がどう反応するか最後まで楽しみだから。
好きではない:緊張して忘れてしまうから。
失敗するかもしれないから。

質問5.英語をもっと話せるようになりたいですか

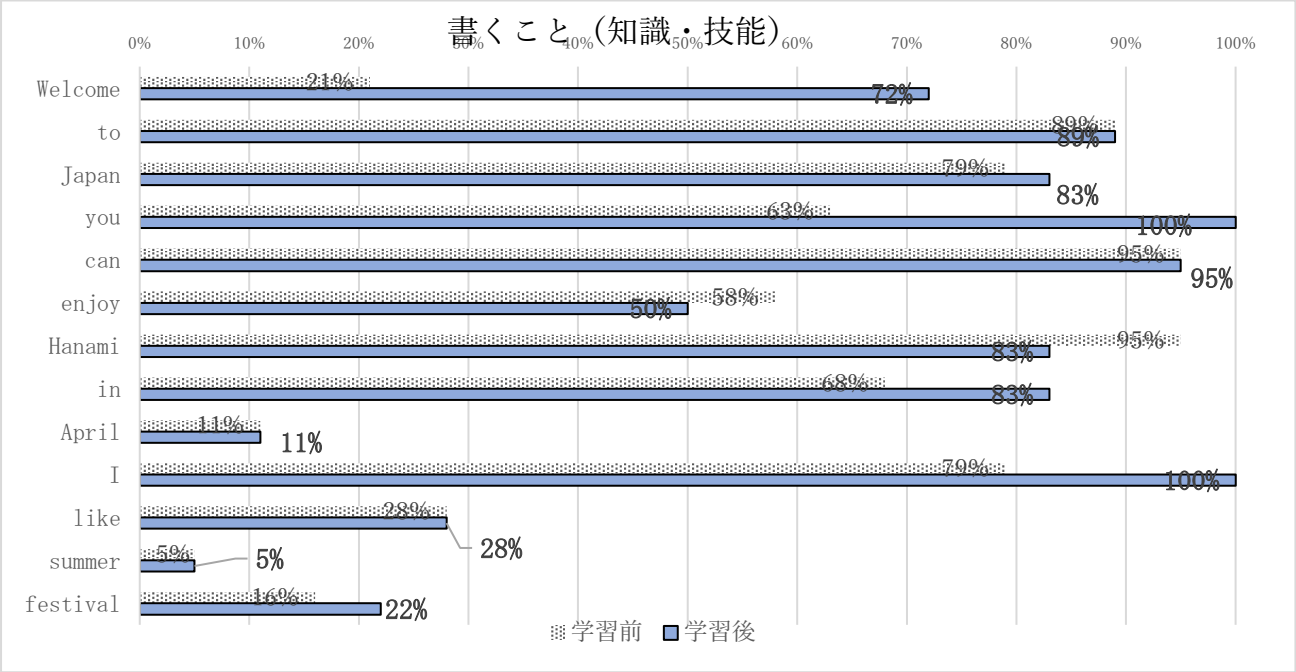




聞くこと(知識・技能)英語文を聞き、日本語で意味を書く方法で実施。



書くこと（知識・技能） 英語文を聞き→書き写す、ディクテーションの方法で実施。



6 授業を通しての結果と考察

○「英語の学習は好きですか」という質問に対して、「好き」「まあまあ好き」と肯定的に答える児童は、95％から100％となった。特に「好き」と回答した数値に注目すると10％上昇しており、英語好きな児童が増えていることが分かる。1年生の時から英語を学習していて、英語の学習に対して抵抗感なく、親しめていることが分かる。

△「自分の気持ちや考えを英語で伝えていますか」という質問に対して「とても思う」「思う」と肯定的に答える児童は74%から100％となった。

一方で「自分の気持ちや考えを英語で伝えたいと思うか」という質問に対しては「とても思う」「思う」と肯定的に答えた児童は学習前90％から学習後74％に減少していることが分かる。

これは、英語でコミュニケーションを図るだけの知識・技能が身につき、コミュニケーションの場も設定されたけれども、自主的に英語を使ってコミュニケーションをとろうというわけではなく、あくまで「与えられればやろう」という、受け身な姿勢の表れであると考えられる。また、ファイナル・アクテビティのゲストとの1対1のコミュニケーションの中で、質問の内容が理解できず、やりとりの楽しさを感じることができないで「難しい」とだけ感じて終わってしまった児童の反応であるとも考えられる。

○「英語でプレゼンテーションすることは好きですか」という質問については、学習前63％から学習後79%に上昇している。自分たちが自由に考えて、覚えた内容を伝えるのは好きということが読み取れる。

△プレゼンテーション資料があると，そちらに気を取られて発表者は読もうとしてしまう。話すこと（やりとり）をねらいとする場合，プレゼンテーション資料に文字を入れない方が望ましい。中学校における指導が原稿を書いてから発表する“prepared speech”から、発表してから原稿にまとめる”impromptu speech”に流れが変化しつつある今、小中一貫の観点から小学校高学年の段階から即興性のベースになる力をつけていきたいと考える。その

ために、small talk や Warm-up などの帯活動を充実させていく必要がある。教師が児童のやりとりの様子をしっかりとモニタリングして、どの児童でも生かせるようなフィードバックをしたり、フィードバックされたことを生かすセカンドチャンスの場を確実に設定したりするなど、授業の組み立てや流し方について再考する必要がある。

△児童の様子をみていると聞き取ったことに対して「Oh!!!!」「I see.」「Me too.」などの限られたリアクションのみを使っていた。英語をコミュニケーションツールとして考えた時に、聴き手を育てていくことも重要である。よりスムーズなコミュニケーションを図って、英語の楽しさを感じるためにも、リアクションの種類により幅をもたせていく必要がある。そのためにも、日頃の言語活動、帯活動の内容の精選が必須である。

○「英語をもっと話せるようになりたいですか」という質問については、89%から95%に微増している。ゲストとの交流を通して、英語に対する向上心をもつことができた児童もいたということが分かる。

○聞くこと・書くことの学習前から学習後の正答率はどちらも大幅に上がった。書くことについては、毎時間、コミュニケーションに重きを置いた展開しているため、ライティングの時間は45分の中で5分弱、2～3センテンスと少ない。しかし、毎回5分でも、積み重ねていくことで知識・技能面は着実に向上していくことが分かる。

7 外国語教育推進のために学校として取り組んだこと

①校外学習を有効活用する。

コロナ流行前の令和元年11月、3・4年生の校外学習で成田空港に行った。今回の研究の手立てでもある、ユニットの最終ゴールを明確にすることがねらいである。「学習したことがどう生きてくるか。」「どれくらい使えるのか。」ということを児童に感じてもらいたいという願いもあった。

1年生の時から学習して親しんでいる「Hello、 I'm～. Nice to meet you.」という挨拶から始まり、「I like～.(食べ物・スポーツ・教科など)What～do you like?」というやりとりを行った。また、インタビューに答えてくれた方には3年生 Unit 7「This is for you.カードをおくろう」の学習の中で作った、オリジナル Thank you カードをプレゼントした。

空港のロビーを歩く外国の方に話しかけることは、初めは勇気が必要で、教師のアシストが必要だった。しかし突破口を見つけると、次々と「Hello.」と自分たちで声をかけることができた。30分程度の活動だったが、非常に多くの外国の方とコミュニケーションをとることができた。

教師が作ったアナウンスカードを
首から下げて、グループごとに活動した。

3年生が作った Thank you カード。
「自分の作ったカードが外国に行く」
という、わくわく感をもっている児童もいた。

バスの中で行ったリフレクションでは「自分の英語が伝わったことが嬉しかった。」「自信がもてた。」「もっと英語で話してみたいと思った。」「外国の人は親切だった。」などの感想を述べていた。活動前の緊張していた表情から、達成感や自信にあふれた児童の表情が印象的だった。

②NOBI-NOBI English

コロナ流行前、長い昼休み「のびのびタイム」を使って、月に1回程度 NOBI-NOBI English を開催していた。全校一斉の英語ウォークラリーを開催したり、英語集会で当時流行っていた「Paprika」の英語バージョンを全校で歌ったり踊ったりした。YOCCA（四街道市国際交流協会）の方にボランティア協力していただき、児童と英語を使ってコミュニケーションを図ることができた。

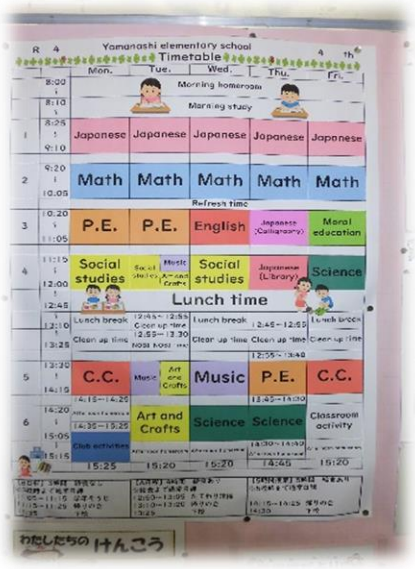
③Class song への取組

外国語科の授業の冒頭 Warm-up で Class song に取り組んだ。HRTが選曲した英語の歌を2～3か月スパンで練習し、帯活動として設定している。児童の実態として、歌を歌うことに抵抗がなく、歌が好きということ、「英会話が上手くできなくても、英語で歌われた有名な歌を歌えれば、世界の人とつながれるかもしれない」と考えたことがきっかけであり、現在も続けている。曲の選曲は、HRTが学級の実態を見極めて、ALT と相談して決めたり、外国語科主任からの提案で決めたりすることもある。

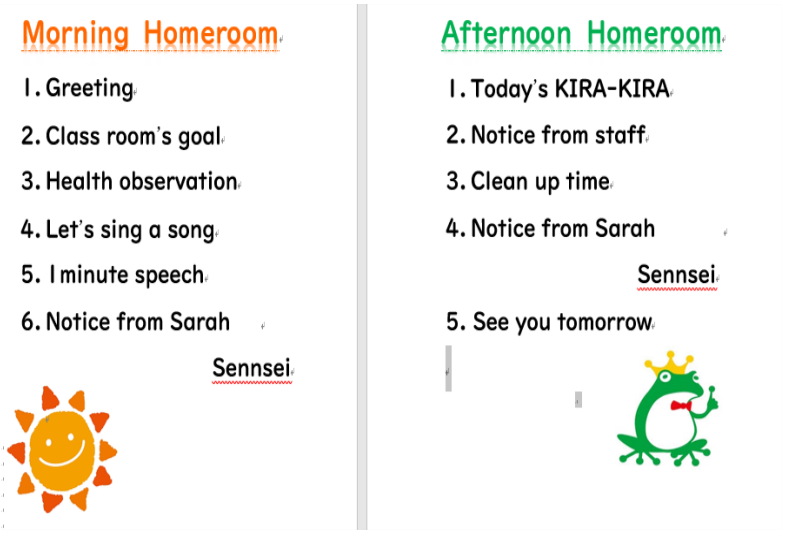
今年度4月からの取組の例をあげると、1年生が「The Star-Spangled Banner（アメリカ合衆国国歌）」、3年生「Paprika」、 5年生「Country Roads」、6年生「We are the world」と様々な曲を歌っている。黙食が続く給食の時間、帰りの会までの準備の時間などに Class song を流した。児童は何度も聞いて耳で覚えて、最終的には歌えるようになることができる。英語に親しむという点で有効な方法だと考えられる。また、外部からゲストを呼ぶ際にゲストにあらかじめ歌う歌を告知して、歌詞カードを渡しておく。ゲストと児童が英語の歌を通してつながれる、という一体感を味わうこともできる。

④Homeroom の英語化（4・6年）

教室内の掲示・朝の会と帰りの会、号令を英語で実施した。4月当初は戸惑いがあったようだが、慣れるまでに時間はかからなかった。朝の会、帰りの会は4月からしばらくの間はペアで実施し、安心感をもって進行できるようにした。日直が3巡する頃には、1人でスムーズに進行できるようになった。こちらも英語に親しむことに有効であると考えられる。



4年生 教室掲示時間割



6年生朝の会・帰りの会の進行表

⑤校内掲示の工夫

校内に英語の掲示物を掲示した。これは、ALTの協力によるものが非常に多い。日本人の教師とは異なったセンスで、様々な掲示物を作成して、児童が英語や外国の文化に慣れ親しむ環境を整備してくれた。

また、職員室にも英語の掲示を積極的に行った。「英語が飛び交う職員室」を目標に，児童と一緒に、教師も英語に慣れ親しみ楽しむことが大切であると感じている。

階段に掲示している Day、Date、Weather などの表示は毎朝6年生の学習係が表示を変えている。

四街道市教育委員会外国語担当から発行されいる「THE QUAD STREET JOURNAL.」中学生向けの内容ではあるが、5･6年教室前に掲示をしている。出ている単語の注釈があり、小学生でも、何となく意味を理解することができる。小中一貫の取り組みとして掲示している。

職員室内の掲示にも工夫をした。「Weekly English」はALTの手作りで、その時々の時事ネタを英語で取り上げている。出入りのために頻繁に使う扉に、ALT配当計画と「THE QUAD STREET JOURNAL.」を掲示した。

⑥ICT 活用能力の育成

外国語科の学習と ICT の親和性は非常に高いことから、積極的に活用していきたいものである。しかし ICT の操作に時間を取られて、学習の目的から外れてしまうことは避けたい。そこで児童が日常的に ICT を使用して、ICT を文房具として自由な発想で活用して慣れ親しみ、これらを通して積み重ねた能力が外国語科の時間にも生かされるようにした。また、教員同士で学年を超えて ICT の活用法を積極的に共有するようにしている。以下、タブレット PC の活用実践例である。

国語科	Microsoft Teams の音読課題 おすすめの図書の紹介カード作成
算数科	ミライシード「ムーブノート」を使って問題の考え方・解き方を学級全体で共有
社会科	社会科新聞づくり 社会科見学にタブレットPCを持参し写真を撮影し新聞に活用
理科 生活科	自然観察会にタブレットを持参し写真を撮影し振り返りに活用 ツルレイシの観察記録を作成 アサガオの観察記録を作成
図画工作科	作品カード作成 作品鑑賞
体育科	実技を撮影し、振り返ったり、友だち同士でアドバイスをし合ったりする活動
家庭科	デジタル教科書で縫い方の手本を確認
その他	連絡帳は Teams での連絡に切り替え、毎日持ち帰りをしている 感染症対応の欠席者は基本的にオンライン授業で参加 委員会活動でお知らせのポスターなどを制作 夏季休業中 Teams を使用してオンライン登校日を実施

8 成果と課題

(1)成果

〇リズムを活用した発話練習は外国語科における知識・技能の向上に有効であった。

〇ICT の活用は外国語科における知識・技能の向上に有効であった。また、主体的な学び、協働的で深い学びにつながった。

〇ICT の活用は、教師側の実態把握、評価にも活用できた。

〇外部からゲストを招待することで、児童の意欲の向上につながった。また、多国籍の ALT と交流したことで、ブリティッシュアクセント、オーストラリアアクセントなどのアクセントに違いに触れ、英語が世界中で使われていることを多くの児童が感じることができた。

〇多くの人と対面で直接やりとりをするということは、オンライン上では味わうことのできない良さがある。外部からゲストを呼ぶのには、学校の協力体制が整っていることが必須である。また、コロナ禍ということもあり、外部との関わりをどうするかという問題、直前での予定変更が生じるという問題も発生するため、そこまで視野に入れて計画を立てる必要がある。

〇HRT と ALT の協力は必須であり、多くの打合せ時間が必要であった。しかし、HRT が授業のビジョンを明確にもち、コントロールしていくことで打ち合わせに要する時間は大幅に削減された。

(2)課題

△ICT を活用した授業には、日頃からICTを扱い慣れていることが必要である。またルールの確認、徹底が絶対条件ともいえる。万が一ICTのエラーが起きた際にどう対応するかの代案を、考えておくことも大切である。また、ICT を使うことが目的にならないような授業の組み立てが必要である。「個別最適な学び」「協働的な学び」を一体的に充実させられるように授業改善や研修をしていかなければならない。

△外国語科の知識・技能の向上を図ることが、英語を使って自ら人と関わろうとすることには直結しない。これは本研究主題とも関わってくることで、まだ不十分であるといえる。「分からない」「難しい」などの困難を乗り越え成し遂げる力、英語でコミュニケーションを図ることの楽しさ、良さ、達成感を感じられるようになるためには、長いスパンとたくさんの成功体験が必要であると考えられる。

9 主な参考文献

・文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説　外国語活動・外国語編」 開隆堂
・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　外国語・外国語活動
文部科学省国立政策研究所　教育課程研究センター
・四街道市小学校外国語科指導基準及び年間指導計画例　四街道市教育委員会
・四街道市小学校　外国語科指導略案　四街道市教育委員会